
~紅~

花崎絢媛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

（紅）

【Zコード】

Z3282D

【作者名】

花崎紺媛

【あらすじ】

普通の高校二年生の紅美樺は一重人格だった。そのもう一人のミ力の事をアイツ『・・・』と言おう。アイツはミ力を不幸におとし ire ようとする魔女だった。ついにミ力は血も涙もないアイツに体をのつとられて・・・しかし・・・その血も涙もない悪魔と思つて いたアイツは心に深い傷を負つていた。ミ力は自分自身のためにも、アイツのためにも自分を救う事ができるのか？！

File.1: 殺人少女（前書き）

『血』を表している文章があります。

そこまでリアルではありませんが（未熟なため・・・）
そして部分、部分そういう表現がありますが、物語的にはホラーで
はありません！はい。

苦手じゃない（読もう！）と言つ方だけ」「ゆっくりお読みください」
！！

白い腕から滴り落ちる深紅のルビーのような赤黒い液体・・・。その液体は白い腕のひじまで到達するとその少女の目の前に横たわっている屍に一滴ずつ屍の洋服に染み込んでいく・・・。

「つはあ、はあ、はあ・・・。・・・がう・・・ちがう。あたしがやつたんじやない！！」

『貴様だ。そこで永遠の眠りについている人間は・・・貴様が・・・紅美権くれないみかが殺したのだ。・・・そう。その手に持っているナイフで・・・貴様が・・・』

氣味の悪い声としゃべり方だった。耳元で囁かれている様で吐き気がした。

「違う・・・あたしじゃない！殺したりなんかしてないっ！」

『・・・死体を学校の裏山の奥深くに行つて埋める。・・・さもなくば・・・捕まるぞ？』

「つーやめて！誰なの。さっきから・・・私に話しかけないでっ！」

『・・・返事はなかつた。ミカは恐る恐る手にしているナイフと自分の田の前に広がる血の海を視界に入れた。

・・・あたし・・・どうすればいいの・・・。やつこえばやつこ・・・アイツが・・・

『死体を学校の裏山の奥深くに行つて埋めろ』って……。ミカは殺害現場となつた王陵高校の屋上から死体を背負つて姿を消した。だが、死体が消えても真っ赤な血の海は満月に近い形の月に照らされ変に光つていた。

（翌日）

「ミカあ？」「飯よ。おきなさー。」ミカの母親がミカを起こしにきた。呼んでも呼んでも起きてこなーので直接起こしにきたのだろう。・・。

「ひーん・・・。今日・・・学校休む・・・。」

「・・・い加減にしなさいーーーほりつ。涼眞君が迎えに来てるわよ。」

「う、リョーマがっ！？」あたし、バツとベッドから降りて急いで制服に着替えた。

「もお。お母さん・・・なんでもうと早く・・・おひじ・・・て・・・いえ・・・何でもありません・・・」お母さんの機嫌悪そうな顔を横目で見てあたしは語つた。

『口答えすると・・・血祭りにあげられる・・・』と。

血・・・そういえば・・・あの光景は・・・夢だつたのだろうか・・・。夢・・・そうであつてほしい・・・。あたし、そう思いながら階段を下りていつた。もし・・・もし夢ではなく、あれば現実であれば・・・私は一生ではなくとも長い間冷たい鉄格子とコンクリートに囲まれた牢屋の中で・・・すりすりとこいいい・・・。

「どうしたの？顔色が・・・まあ、あなたは年中白こしね。ははは
つ。」・・・我が母ながら・・・年中陽気で・・・ついやまじこ・
・。

「あ、リョウマ。ちよつとだけ待つて！すぐ」飯済ませてくる！..
あたし、玄関に座っていたリョウマに顔の前で手を合わせて、ゴメン
つーのポーズをするとすぐさまキッチンへ行き冷蔵庫からバターロ
ールをだしてほおばつた。それを見てお母さんが

「まあ・・・はしたない。あんた・・・女の子でしょ？もう少し
お上品にしたがうどうなの・・・。はあ・・・雄輝はあんなにおとな
しいのに・・・姉として恥ずかしくないの・・・」

「もあ・・・つるやこなあ・・・。あたしはあたし。コウキはコ
ウキ。姉も弟もない！行つてきます！..」

ミカは走つて玄関に行つてしまつた。

「はあ・・・。どうで育て方を間違つてしまつたのかしら・・・は
あ・・・」

「ああ。コウキ。行つてらっしゃい。」

「コウマ、」めん！待たせたね・・・。」再びゴメンのポーズ。

「いいよ。ミカの寝坊は今に始まつたことじやないし。」「うう・
・。あたしが悪いんだけど・・・ちよつとムカつく・・・。

「あ、ゴウキ。おはよー。」リョウマが私の弟、ゴウキに挨拶する。

「……おはよー」やれこめす。朝から大変ですね。リョウマさん。・・・猛獸のお散歩・・・」

・・・猛獸・・・ってあたしのこと?!

「だねえ。でも毎回のことだからなれちゃつたよ。」「ううつ・・・。

星峰涼眞は私の幼馴染。この家の、隣の隣に住んでるの。もう・・・超アイドル顔でえ、かつじょくてえ・・・ってそんなんじやないからねつ!――!

私の弟の紅雄輝は、顔はすつしょくして、バーツそろつて、スタイルもよくて、じ〇〇しで、頭よくて・・・あたし以外のメスだつたらお好みの男子だらうけど・・・性格・・・悪すぎ・・・。

「ミカア。いつまで突つ立つてんの・・・。俺一人で行くよ?」

「あ、ちよつとまつてよ。」ミカはそう叫ぶと急いでリョウマの自転車の後ろに座った。

「・・・ったぐ・・・。色氣もへつたくれもねえなあ。女子なら横

向いて座れよ・・・。スカートのくせに堂々と座りやがつて・・・。

」リョウマが後ろを向いて呟く。

「へ? 何のこと?」

「・・・リョウマさん。猛獸に何言つても無駄ですよ。馬の耳に念佛?・・・違うな・・・。虎の耳に念佛?て感じ・・・。まあ、馬

のほうが大人しく聞いているだけ利口だな……ふつ……つと前を自転車で走っているコウキが言つ。

・・・・・私つてそんなに色氣ないの？――ショック・・・・・。

「だなあ。せつかく美人なのにもつたいねえな。」え・・・・・。美人？うれしい／＼／

「ねえ、リョウマあ。」ん？何だと聞き返してくれるリョウマをあたしは愛しく思った。

次々とこみ上げてくる感情を抑えきれなくて、一生懸命自転車をこいでいるリョウマの腰に手を回してギュッと抱きしめた。こうこうのが【幸せ】って言うのだろう。

・・・・美香はそう思つた。【不幸】を知らないといつのが【幸せ】だ。

。この後の【不幸】が訪れることはアイツしか知らないのだから・・・・・。

（学校到着）

「？みんななんかざわざわしてるな・・・・・。なんだろう・・・・・。

「・・・・・」・・・・・もしかしたら・・・・・もしかしたら・・・・・。

「・・・・・事件があつたみたいですね・・・・・」コウキが冷静に口を開く。

「な、何であんたにそんなことがわかるのよ。」私、ちよつとあせる。怖くて怖くてリョウマの腕を握る力が強くなる。

「だつて・・・屋上に人だかりが・・・たぶん警察だと思つけど・・・しかも駐車場に刑事の車あつたし。」・・・。どうしよう・・・。昨日のことが事実だとしたら・・・。

「さすがユウキだなあ。よし。屋上に行つてみようぜー。」リョウマがはしゃぐ。

「そうですね。俺も行きます。」・・・。本当ならば・・・。この事件（？）に無関係です！って言い切れるなら・・・。リョウマが行くんだから私が行くのも当然・・・。でも・・・無関係かどうか・・・。わかんないよ・・・もし関係あるなら・・・。張本人だよ！あたしは！

「ミカは行かないのか？」リョウマはミカの顔を覗き込んだ。

「あ、あたしは・・・いいや。」

「なんだあ？怖いのかあ？あ、怖いんだろうーー。ヨワムシー。」・・・。・ゴメン・・・リョウマ・・・冗談で言つてゐつてわかつてゐよ。でも・・・本当に怖いの・・・そうだよ。ヨワムシだよ。真実を知るのが怖いだけ・・・。

「・・・足・・・震えてんぞ。・・・怖いなら怖いって言えよ。横に素敵なヒーローが一匹もいるだろ？」

「・・・うん。そうだね。たのもしいや「私はその優しい言葉のせいで目から次々と涙がこぼれて校門のところに植えてある芝生を潤した。そうだ・・・あたしにはこんな頼もしいヒーローが一匹（違）もいるじゃないか。怖くない。

『……怖くない……とは随分と勇敢になつたなあ。ミカ。早くそいつらと屋上へ向かうのだ。』

「や……やめて……誰なの？あたしに話しかけるのは……」

『私が？私に名などない。……しいて言えれば……貴様の中にいるもう一人のミカだ。……まあ……自己紹介は終わりだ。早く屋上へ行くのだ。』

「や……やめて……あたしの中にもう一人のあたしなんかいな……あたしはあたしよ！」

「……？」どうしたんだミカ。さつきから独り言がヒドイぞ？』

「ち、ちがうよ。独り言なんかじゃない……あたしに話しかけてくる奴がいるの……」

「えつと……そんな奴はいないけどなあ……」リョウマが周りをキョロキョロと見る。

「……私の心から……私のもう一つの人格が……私に喋り掛けてくれるの……！」

リョウマは疑つた目であたしを見てくる。……そんな目で見ないで……リョウマからそんな目で見られたらあたし……どうしたら……

そのとき、リョウマとミカのやり取りを黙つて見ていたユウキがミカを抱き寄せてミカの手を手でふさいだ。

「なんだよ急に……姉弟で……」

「……なんだよ、はあんただ。リョウウマさん。あんた、少しほ……
・気付いてんだろ? こいつが……ミカがあんたのことスキだつ
てこと……なのにそんな目で見て……ちょっとは考えろよ。好
きな奴にそんな目で見られるのがどんなひらうか……。」

ちよ、ちよつと一回言ひてんのマイラーかいに加減はな……せ・

「……」そんな勝手な言い分に反論一つ帰つてこず、足音はどんどん
あたしから遠ざかっていった。これは……あたしとリョウマ
の心の距離だ。ここで何も言わずに去つていた。それがリョウマ
の本当の気持ち……。本当の答え……。

ミカはユウキの手でふさがれた目から蜜柑のような涙を流した。

「……」そして少しの間その姉弟は紅葉した葉が落ち、風と一緒に
になつて舞うのを一緒にみていた。

（放課後）

うつうつ……気まずい……リョウマと一緒にクラスだつて喜んだ一学期が懐かしい……。
しかもよりによつて隣の席かよ……ビリビリよう……のままでつてのも嫌だな……。

「あ、あのわあ、わ、わあわあ! めんな?」えつ? リョウマが謝つ
てる? マジで?

ミカは夢ではないのか? と言わんばかりにリョウマの頬をつねる。

「二ちゃん。」ひらひらも「あんね。」ウキがへんなこと言ひやがつて。あひだもひとかなあや。」

「え? なんでユウキを叱るの? 別にウソではないだろ? 叱ることないよ」あ、そっか。別に変なことではないよね・・・って

「スキ、なんだろ？ そんぐらい小さじ口ばかり知つてゐよ」 もお／＼恥ずかしい／＼＼

「あ。そうだ。仲直りもかねてユウキと三人で屋上見に行こうぜ。さつきお姉さまを傷つけちゃったからなあ。ユウキ、怒つてるだろうな。」

「別に怒つてはいないと思つよ?」・・・アイツかわいそつだな・・・
・トヨウマが弦く。

「なんだ？」アレルギー性アレルギーの耳鳴りが止まらない

「男の秘密は告げ口禁止だ。」と。クスッと笑いながら教室を出て行ってしまった。

「ねえ。ワーム? なん? 何? 」こう返事。やつぱつこのヒトだけは離したくない。離れたくない。だって・・・スキなんだもん・・・

File.1：殺人少女（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございました。
連載ですので、これからもよろしくお願いします！

「コウキの教室の前にて……」

「な？朝の事は「めんつ。許せ……じゃなくて……許してくれださ
い！」

「……」

「……許せなきやお前の秘密をミカにばらり……ぐふあつ……
！」コウキはリコウマのみぞおちに右フックを……あたしま……
どづくれば……

「やめときなよ。リコウマさん。……俺と喧嘩すると……その
綺麗なお顔がグチャグチャになつてモアイ像みたいになるよ？」
とにこやかに怖い事をサラリと口に出す。

表情と言つてゐる事が矛盾してゐ……。怖い……。

「ま、いいか……。今のフックでチャラにしてあげるよ……今
度俺を脅すと墓場に埋めるから。ね？センパイ。」

「あはははははははは……」「うううう……ははがイタイ……
。」

「じゅ、じゅ、あ、廊上見にに行つた。」「コウマ。あるとコウキ
もやつですね。と廊上へ向かつ。」

・・・怖い・・・。やうじうう・・・行きたくない・・・。

『クスッ・・・ほひ。言つただろひ。「怖くない」といつ言葉は弱虫が強がるときに使つ言葉だ。まあ、いい。お前もまだ17つの小娘だ。私もそうだが・・・貴様より知能は上だ。それはさて置き・・・早く屋上へ行け!』

「ねえ、昨日の夢は現実だつたの?」

『・・・夢・・・?お前は夢など見ぬはずだ。教えておいてやうつ・・・私はお前のもう一つの人格でもあるが・・・それ以前に夢魔族だ。人間どもの悪夢を喰らい、生きている。だから貴様は夢など見るはずないのだ。・・・貴様のみる夢は・・・悪夢だらけだ。ククッ・・・貴様の夢は格別の味だ・・・』

・・・夢魔族・・・悪魔?よくわからない・・・。

「おこ、どうした?ミカ。」随分と遅れをとつたので心配してリョウマが見に来たようだ。

「・・・あ、ごめん。ちょっと考え方してた。」

「そつか。それよりな、現場見てきたんだけどよ、血の池地獄だつたなあ。ブクブクとはなつてないけど・・・が、要するに血の海?」

「ーー」あたし、走り出してた。屋上に向かつて。

「ギイツ」屋上の扉を開けるとたくさんの警察が指紋取りや理事長、校長、教頭先生から聞き込みなどをしていた。

「・・・あつ!ー!ー!」あるものを見て私はビックリした。

「ミカ、どうしたんだよ。いきなり走り出して……。しかも「あ
つ……」って何?」

リョウマが息を切らして一気にしゃべる。でも・・・今のミカの耳にはそんな言葉など入っていなかつた。

「あ・・・あ・・・ああ・・・わやああああああ――――――.」

・・・それがらじばらくなつたと思つ。・・・多分あたしは氣絶したんだと思つ。・・・ショックで・・・ベッドに寝てる・・・保健室か・・・。

「つヨウマ、コウキ。」めんね。心配かけて。」ベッドの周りにはリョウマ・コウキ、そして保健室の先生がいた。

「……こ、こよ。それより……心へったんだ?」
きなり眞緑つて……」

「・・・なんでもないよ。あまりにも血の海がグロくて・・・怖くなつたの。」

「……なんだ。そんなことかあ……。ビックリしたよ……。」

「ふつ・・・・人騒がせな猛獸だな・・・射殺せねば・・・」ユウキ
怖つ・・・。

でも・・・本当はグロかつたから怖くて・・・とかそういう理由じ

やない。・・・
だつて・・・あの現場には・・・ある物だけ残つて・・・ある物が

なかつた・・・。

そしてそれをあたしは覚えてる。あの現場にあつたもの・・・血の海・・・。現場からなくなつた物・・・死体・・・。

「帰るうか。ミカ。よし、今日はミカん家でスキヤキパーティーだつ！―！材料はまかせろ！―！」

「・・・ちょっと、なんでリョウマが勝手に決めんのよ。」もう一ホンツト勝手なんだから・・・。

「くすつ・・・」ぐるぐる。俺はお先に帰らせてもらひつよ。・・・バカッフルがいるとうつとうじこからね。じゃ、先生、うしの猛獸がお世話になりました。」

そういうながらゴウキは帰つてつた。つて・・・バカッフルつて・・・

「んじや、私も職員会議でなきや。なんでも屋上で多量の血痕が見つかつて・・・なんでも被害者が消えたらしいからねえ・・・さ、私もバカッフルがいると殺したくなつちゃうからさつやと会議に行つちゃおうつと。・・・会議が終わるまでには帰るんだよへへでないと・・・埋めちゃうから。」

「えつ・・・そういうえば・・・血の海しかなかつた・・・あんだけ血い流すほどの怪我したら親が気付くだらうし・・・どこ行つたのかな・・・。」

「うしょり・・・私に殺意がなかつたとしても・・・私が殺したんだ・・・」の手で・・・

そうだ・・・あれは夢じやない・・・。昨日の夜の事だ・・・。

夢なんかじゃない・・・。

「なあ。ミカあ。先生も会議に行つてしまつただ? 早く俺たちも帰ろ
うば?」

「リョウマあ・・・怖いよ。」私、リョウマの制服の裾をつかむ。
「リョウマあ・・・怖いよ。」私、リョウマの制服の裾をつかむ。

「大丈夫だよ。きっと犯人もすぐ捕まるつて。安心しろ。俺がつい
てる。バカツプル同士でいたらと、捕まらないつて。」

・・・こんなにうれしい事言つてもうらつてゐるに・・・好きなヒト
にこんなこと言つてもうらつてゐるに・・・うれしいけど・・・うれ
しくないよ・・・。ダメだよ・・・。犯人はあたしなんだよ・・・。
もし・・・もしリョウマにあたしが犯人つてばれたら・・・やつぱ
り通報されちやうのかな・・・? やつぱり避けられる?・・・絶交・
・・?

やだよ・・・そんなの・・・絶対やだよ・・・!!

「どうしたの?ミカ。早く帰ろ!」

「あ、そ、そうだね。うん。」

（帰り道）

「ねえ・・・リョウマ? あたしが・・・もしあたしが・・・ひとこ
ろしたひどうする?」

ストレートな質問だった。もう少し具体的に聞けばよかつたんだけど
思つたけど・・・あまり詳しく述べると・・・勘がいいリョウマには
気付かれてしまうかもしけなかつた・・・。

「ミカが？人殺し？ははっ。無理だな。第一凶器ももてねえだろ。臆病だからなあ。」

ちがう・・・あたしが聞きたい事はそんな事じゃ・・・

「もし殺したとしても・・・俺は共犯者になるぜ！なんせ・・・バカップルだろ。俺たち・・・でも・・・ミカはそんな事する奴じやないし。共犯者にはなれねえな。はははっ」

・・・リョウマ・・・。ありがとう・・・。でも・・・そんな事する奴なんだよ・・・。あたしは・・・。

『ククッ・・・。「そんな事する奴じゃない」か・・・。このガキもいうものだな・・・。バカはバカラしく貴様の死まで幸せに暮らしておればよいものを・・・。このガキ・・・貴様の共犯者になるつもりか・・・。ククッ・・・。』

「やめてッ！あたしから出でつてよー！リョウマのこと・・・悪く言わないでつ！」

「・・・?どうしたんだ？!ミカ・・・?ミカ？」リョウマの目の前のミカはすこし様子が変だった。

「クククククッ・・・。なんでもないよ。リョウマ。ほら、あたしの家でスキヤキパーティーするんでしょ？早くいこつ？」

「・・・そうだな。行こつか。あ、俺、家に帰つて材料とつてくるわ。」

じゃあなつとリョウマは家に帰つていった。

「ククククツ・・・。やつとてにいれたぞ。ミカの体・・・。今日から私がミカだ。貴様は一生私の中で生きるがよい。私の命尽きるとき・・・。貴様の命も尽き果てる・・・。そうだ・・・。朝と昼は私がこの体を支配しよう・・・。夜は・・・。貴様の好きにするがよい・・・。」

クスクスクスツ・・・。今日から・・・。紅くれない美權みかは私だ・・・。

「クスクスクスクスツ・・・。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3282d/>

～紅～

2011年1月21日02時31分発行